変わるものと変わらないもの

―過去と現在を浮遊する私―

津守　真

二〇〇二年一月半ば、私は久しぶりにお茶の水女子大学附属幼稚園を訪問した。十八年前、この幼稚園で過ごした最後の日に、私の手に優しく触れた子どもの手のぬくもりが、この年月、いつも私の心にあった（注1）。久しぶりに訪問する緊張感を抱いてこの日を待っていたとき、今度もきっとだれかが私の手に触れて来るような気がしていた。

この日は雨が降りそうだったが、冬にしては暖かい日だった。三歳児の森の組に一歩入ったとき、一人の男児がプラスチックの組み木を長くつなげているのが目に留

まった。私があるとき決意を新たにして、三歳児が五歳になるまでの三年間を保育実習生として同じクラスで過ごそうと思った最初の日の光景と同じだった（注2）。私はその子が同じように自動車を作るのかと錯覚しそうになったが、この日は違っていた。当たり前である。子どもは毎日、毎年違うのだから。クラスの先生も、十八年前はベテランのH先生だったが、この日は若いM先生である。

私は庭に出てみた。隣の川の組の女の子が「おじいさん、どこから来たの？」とたずねた。以前には私は「おじさん」と呼ばれていた。年月を経ているのだから、これも当たり前である。

砂場で何人かの子ども達が水を流して水路を作っていた。水に手を入れて、砂の塊をいじっていた。その前日、愛育養護学校で、ひとりの体の大きい子どもが、水に手を入れて長い時間をかけて水路を作り、ひとかたまりの砂を手でほぐして硬い石を取り出しているのを見ていたので、子どものイメージには共通のものがあることを私は思った。かたわらに磁石で砂鉄を集めている子がいた。皆から「博士」と呼ばれていた。私は砂場から遊戯室へ、またクラスへとゆっくりと移動したが、今日は私に近寄って手にさわる子どもはいなかった。それよりも、一歩足を運ぶ度に、この幼稚園で過ごした三十年間のさまざまなことがおのずから私の心に浮かんできた。私はこの場所で、自分がどう生きるかを、長い年月考えて来たのだった。

森の組を出たところにある川（水は流れていない）に渡した橋の傍らで、私がまだ米国に行く前だから昭和二十年代に、三歳の男の子を、自分の正義感から、大きな声を出してその子の肩を揺さぶったことがあった。保育のあとで、担任の堀合先生から、今日のあなたの保育は小さなお子さんにふさわしいものではありませんでしたね、子どもの心はもっと淡いものですとたしなめられた。細かなことは覚えていないが、あのときの強烈な印象を私は忘れることができない。「子どもの中にいるとき、自分の正義感が先に立つことがある。そういうときはよくない」とこの日我が家の前の幼稚園の子どもたちと遊んで帰って来た妻がふと言い出した。私は直ちに同意した。これまでに何度か私は同様な過ちをした。その最初の鮮明な記憶である。大人の正義感をあらわに表現することは教育の上で必要だと言われることがあるが、よく考えれば、それは大人の考え、常識の中での正義感である。そのとき、大人は子どもの側の見方を忘れている。子どもの言い分に耳を傾けることが先であることを、当時二十歳だった私はこの庭の左端の橋の傍らで学んだのだった。私の思いは現代に飛ぶ。一方的な正義感の故に、他者の存在が目に入らなくなるという現代の世界の悲劇。子どもたちの間で起こっている状況、その子の感じ方、理解力などの全体をとっさに考えて判断するのが保育であって、理念だけを取り出して善悪をきめるのでは、人間の倫理にならない。

園庭の反対側の橋に行ったとき、私は米国から帰って直後のことを思い出した。及川ふみ園長が北海道のトラピスト修道院で大きな動物のぬいぐるみを頂いて（こんな大きなぬいぐるみの動物を見たのは初めてだった）子どもがどのように遊ぶかを心理学的に研究してほしいと言われて、私は幼稚園の観察研究をはじめたのだった。カンガルーの赤い舌の先や、ペンギンの黄色い口ばしが子どもに喜ばれたのを思い出した（注3）。その心理学的研究はさらに進んで、保育室の角に、当時は珍しかった観察室を大工さんに作ってもらった。及川ふみ先生は直ちに私の提案を実行してくださった。窓の外側に白い網を内側に黒い網を張ると内部が暗くなり、観察者は向こう側から見られないで保育室を観察できる。この観察室は幼稚園の先生たちからはひどく評判が悪かった。一方的な観察だから、それは当然である。観察者は子どもや先生からは見られない透明な存在になるべしというのは当時の心理学的観察の第一の心得だった。倉橋惣三先生が児童学科をつくられたとき、子どもに直接ふれる実習が児童科の一年生の必修カリキュラムに入れられた。こんな単純なことを実行するのがいかに困難だったことか。保育に参加して観察することが方法として認められるのには長い年月がかかった。

門に近い場所にあった物置小屋を改造して「子供の家」にしたのは昭和三十年代初めだった。これも及川園長の発案だった。いまも子どもたちの遊びに使われていると

の話を聞いて私はうれしく思った。当時私はそこでドールプレイの研究を行った。子どもをひとりずつ連れて来て、設定された条件下で観察するという研究である。この種の研究は、研究報告には便利だが、それが毎日の保育にどう寄与するのかを私は示すことができず、これも先生たちの間では評判が悪かった。私はもっともだと思った。そんな経験から、私は最もシンプルな方法で、保育の中で起こっていることをそのままに、できるだけ毎日記録を積み重ねることをはじめた。昭和四十年代はじめである。私一人ではできないから、学生さんたちに協力してもらった。その中にはこの日私を案内してくださった副園長の桝田正子さんもいた（注4）。なまの記録そのものの中に意味があることを知ったのは更に後であるが。

この日、一人の子どもが、「おばけやしきに来てください」と私に紙片を渡してくれた。遊戯室でやっているという。遊戯室に行って紙片を見せると、まだ開いていないと言う。しばらくして再び行ってみたが、お化けのお面をかぶった子が、数人の子と言い合いをしていた。あとで先生方と話したとき、この子たちは今日はうまくいかなかったと行って帰ったとのことだった。遊戯室では他の子どもたちが面白く遊んでいた。それを見ている間に私はこの場所で、何度となく「おもちゃや」「動物園」など誘導保育の最終日を見たことを考えていた。この幼稚園の誘導保育には大正の末からの歴史がある。私が知っていた昭和三十年代、四十年代も、まだ盛んだった。一学

期かけてたとえば「おもちゃや」で、さまざまな時計、写真機、風車……を作りためておく。どれも子どものアイディアを先生が一緒に考えて作るから面白かった。時計ひとつをとっても、腕時計、懐中時計、柱時計、置き時計、飾りやデザイン、形や色がさまざまで、どれひとつ同じものはない。絵本を作るのにも、掌に入るような小さな絵本、マンガ、字の書いたものなどお話もさまざまだった。箱を使ってカメラを作ると中から絵本が出て来たりする。先生も毎日考えていないと、子どものアイディアに追いつかない。日々の遊びの中で作った物を藁のつとに挿して皆が見えるように一学期間ためてあった。私はそのアイディアを我が家に持ち帰って、当時幼児だった私の子どもたちといろいろの物を作った。それはかならず子どもたちに受けた。一学期に一度大売出しが遊戯室で行われるときには、他のクラスも招待された。見物の私にはそれが売れてしまうのが残念でたまらなかった。坂元彦太郎園長が少し引きずる足であちらからこちらへと歩き回りながら、いまもそこにおられるような気がした。

そのころ、運動会の練習の時期になると、子どもたちの普段の様子が荒れてきて、おねしょが多くなったり、幼稚園に朝来たがらない子どもがふえることに私共は気が付いた。保育者には気が付かないことが記録者には見えることがある。私共がそのことを話題にすると、担任の堀合先生は直ちに練習なしに本番の運動会に臨むことを断行された。以前には小学校の校庭で幼稚園も合同の運動会だったが、現在は幼稚園の

園庭で幼児に無理のない運動会をしていることを、この日に私は知った。

一九六八年―六九年に、フルブライト交換教授として、デール・B・ハリス教授がお茶の水女子大学に来られ、附属幼稚園を見て、米国で失われたものがここにある、自分はノスタルジアを感じると言われた。それから更に三十年以上たって、米国の幼稚園は管理主義に傾いても、この幼稚園は日本で培われた進歩主義教育の本質を保っているのをこの日に私は見た。日本から世界に発信する幼児教育があることを私は心強く思った。

注1『幼児の教育』第八十二巻第四号一九八三年『保育の一日とその周辺』フレーベル館　一九〇〇年所収

注2『幼児の教育』第七十五巻第十二号一九七六年『保育の体験と思索』大日本図書　一九八〇年所収

注3『幼児の教育』第五十三巻第十号一九五四年『幼児の教育原理と研究』（津守、木原編）フレーベル館　一九六七年所収

注4磯部景子他、「五歳児の記録」『幼児の教育』第六十四巻第六号一九六五年―第六十七巻第十号一九六八年　フレーベル館